

今週の為替相場見通し(2024年3月25日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		148.90 ~ 151.86	151.49	148.50 ~ 152.50
ユーロ	(ドル)		1.0802 ~ 1.0942	1.0809	1.0680 ~ 1.0950
(1ユーロ=)	(円)		162.00 ~ 165.33	163.69	162.00 ~ 165.00
英ポンド	(ドル)		1.2576 ~ 1.2803	1.2602	1.2450 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	189.54 ~ 193.54	190.77	188.00 ~ 194.00
豪ドル	(ドル)		0.6504 ~ 0.6634	0.6515	0.6480 ~ 0.6620
(1豪ドル=)	(円)	*	97.58 ~ 100.17	98.66	97.50 ~ 100.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1)今週の予想レンジ: 148.50 ~ 152.50 円

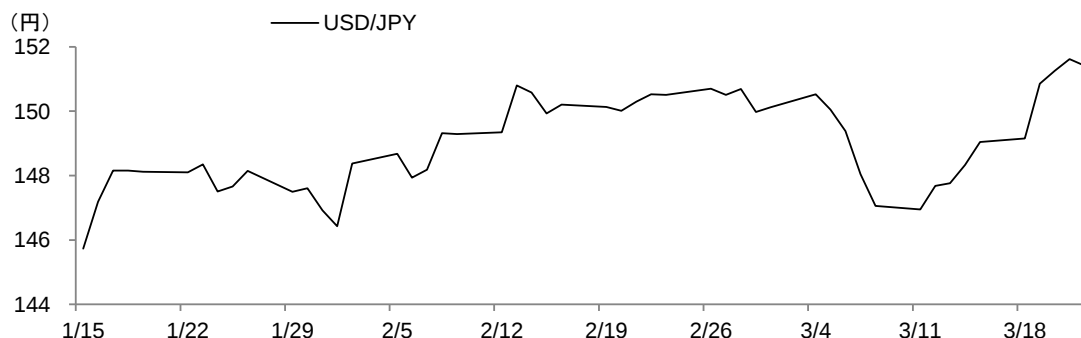
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は日銀金融政策決定会合の結果などを受け、円安ドル高の流れが強まる展開となった。週初18日は148.95円でオープン。日経平均株価が大幅上昇したことなどがサポート材料となり円売りドル買い基調となったものの、翌日に金融政策決定会合の結果公表を控え方向感に乏しい値動きとなった。19日、日銀金融政策決定会合では、マイナス金利の解除、イールドカーブコントロール(YCC)の撤廃、ETFなどの買入停止などが決定された。概ね事前報道に沿った内容で大きなサプライズはなかったものの、長期国債の買入継続、「緩やかな金融環境が維持」が掲げられたことなどによって、円売りの流れが強まった。20日は東京休日であったが、FOMCの結果公表を翌朝に控え、タカ派警戒モードが市場で広がっていたこともあってか円売りの流れが一段と強まる場面が見られた。一方で、21日早朝に公表されたFOMCの声明文及びパウエルFRB議長の記者会見は、警戒されていたほどタカ派スタンスが示されなかったことで円売りの流れが一服し、150円台前半まで巻き戻す展開となった。しかし、欧州時間に入りスイス中銀が予想外の利下げに踏み切るとドルが主要国通貨に対して上昇。加えて、NY時間に公表された米経済指標が軒並み強めな結果になったこともあり、上値を伸ばした。22日は人民元売りから全面的にドル買い地合いとなり、一時151.86円と年初来高値を更新。その後は151円台半ばを中心とした値動きが続き151.49円で週末を迎えた。

今週のドル/円相場は上値が重い展開を予想。前週行なわれた日銀金融政策決定会合の内容は大方の予想通りの内容となったことに加えて、緩やかな金融環境が当面の間維持されることが強調されていた。賃金上昇圧力は以前に比べれば高まっているものの、中小企業を含めた幅広い層に恩恵が継続的に拡がっていくには時間がかかる可能性が高い。そうした中、日銀が更なる利上げに向けて動きにくく、市場もその点を十分に織り込んでおり、円が買われる材料が出てくる可能性は低そうだ。一方、米国に目を向けると、ディスインフレは緩やかで、利下げ観測は後退しやすい環境にあり、ドルが買われやすい地合いになっている。もっとも、151円台後半以降は、本邦財務省による円買い介入に対する警戒感が徐々に強まる可能性が高いだけに、ドル高円安一辺倒の地合いにもなりにくく、結果149円台後半から151円台半ばを中心とした上値が重い推移になると見ている。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/18~3/22)の値動き: 安値 148.90 円 高値 151.86 円 終値 151.49 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第一チーム 南野 光喜

(1) 今週の予想レンジ: 1.0680 ~ 1.0950 162.00 ~ 165.00 円

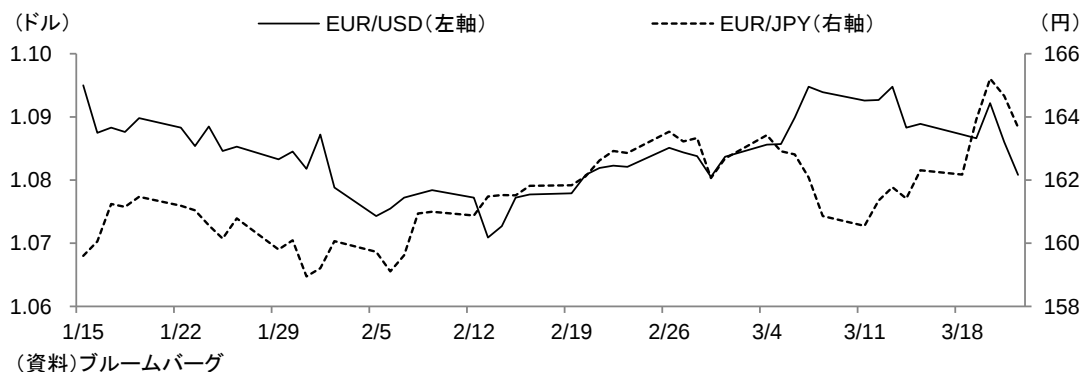
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは週後半に中銀イベントの結果を受けて上下する展開となった。週初18日、1.0883でオープンしたユーロ/ドルはユーロ圏2月消費者物価指数(HICP、確報値)の発表を前に上昇を始め、市場予想通りの結果を受け、1.09台前半まで底堅く上昇。19日にはじりじりと値を下げ一時1.0835まで下落したが、その後ユーロは買い戻され1.0867でクローズ。20日、FOMCの結果を控えて様子見ムードとなったが、ラガルドECB総裁の早期利下げを思わせる発言が伝わると、ユーロ売り優勢の展開に。注目されたFOMCでは政策金利は据え置かれたが、パウエルFRB議長のハト派な発言によりドル売り優勢となり反転上昇。21日には1.0923まで高値を切り上げたが、スイス中銀が利下げに動いたことや予想比弱いユーロ3月製造業PMI(速報値)の結果を受けて、大幅に下落。米国時間には予想比強い米3月製造業PMI(速報値)の結果からドル買いが加速し1.08台後半まで値を下げた。22日はユーロ売りドル買いの流れが続き、下値を切り下げる展開に。ロンドン時間に発表された独3月IFO企業景況感指数は予想よりも上振れる結果となったが反応は限定的で、結局1.0809で越週した。

今週のユーロ/ドルは中銀イベントを通過し、材料難からもみ合い推移を予想。ラガルドECB総裁は20日の講演で、利下げはデータ次第との姿勢を維持しながらも、「4月までにはもう少し、6月にはより多くの情報を得られるだろう」と6月会合での利下げを示唆するハト派的な発言もあった。さらに先週スイス中銀やBOEでハト派的な会合が続いた中では、ECBによる早期利下げの思惑は拡大しており、ユーロを買う展開は考えづらい。一方で、米国は先週のFOMCにて政策金利を維持したものの、パウエルFRB議長は会見の中で「今年中に緩和を始めるのが適切になるだろう」等の発言をしており、ハト派な姿勢を見せた。FRBとECBの金融政策が概ね同様となる状況下では、ユーロ/ドルは方向感が出ない可能性が高そうだ。また、今週の主な経済指標・イベントとして27日(水)にユーロ圏3月消費者信頼感指数(確報)、28日(木)に独3月失業者数の発表を控えている。なお、29日(金)はイースター休日で、週後半につれて閑散としたマーケットとなりそうだ。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/18~3/22)の値動き: (対ドル) 安値 1.0802 高値 1.0942 終値 1.0809
(対円) 安値 162.00 高値 165.33 終値 163.69



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2450 ~ 1.2800 188.00 ~ 194.00 円

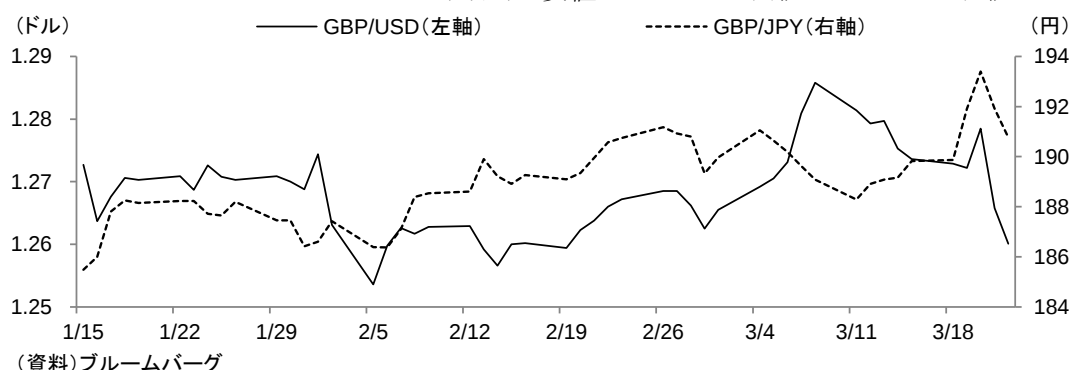
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで約▲1.0%下落。21日のBOEの金融政策決定会合では、マン委員とハスケル委員が利上げ票を取り下げるなどのハト派サプライズがあった。同日にスイス国立銀行(SNB)がG10中銀で今局面で初の利下げに動いたことや、ユーロ圏の3月総合PMI(速報)が悪化するなど景気低迷の長期化が意識されたことも、グローバルなドル高を促したものと見られる。対円では週初の189円80銭台から20日から21日にかけて193円50銭台まで上昇した後に190円台まで値を戻している。19日に発表された日本銀行のマイナス金利解除は、追加利上げは非常に緩やかになるという見方が強まったこともあり、現時点で円安圧力を和らげるものにはなっていない。改めてBOEの3月会合を振り返ると、2つの点でハト派サプライズがあった。(1)据え置き決定は8対1(1票はディングラ委員で利下げを主張)で2月会合で利上げ票を投じていたマン委員とハスケル委員が据え置きに転じたこと、(2)声明文において、「金融政策が既に景気抑制的な領域にあることから、金利が引き下げられたとしても政策は依然として景気抑制的だろう」との2月には盛り込まれなかった文言が追加された。会合前日に発表された英2月消費者物価指数(CPI)が前年同月比+3.4%と、1月分の同+4.0%から低下し、当局の想定以上にインフレ率の低下が進んでいることや、英国で低成長が継続する兆候を示す経済指標が相次いでいることが、こうしたスタンスの変化に表れているだろう。ペイリーBOE総裁は会合同日に「私には市場のイールドカーブを支持するつもりはないが、インフレ動向を踏まえ、市場がそのような見方を有することは理にかなっていると私は考えている。」と述べている(短期金利市場ではBOEが2024年に2~3回の▲25bpの利下げを実施するとの見方が織り込まれている)。

今週の英ポンド相場は、市場のカタリストとなるような大きな材料は見当たらず、ポンド安の流れが継続する可能性に留意したい。英国では、25日(月)にBOEのマン委員の講演がアイルランドのベルファストで予定されている。「超タカ派」と目される彼女が、なぜ3月会合で利上げ票を取り下げたのか、説明が注目される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/18~3/22)の値動き: (対ドル) 安値 1.2576 高値 1.2803 終値 1.2602
(対円) 安値 189.54 高値 193.54 終値 190.77



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6480 ~ 0.6620 97.50 ~ 100.00 円

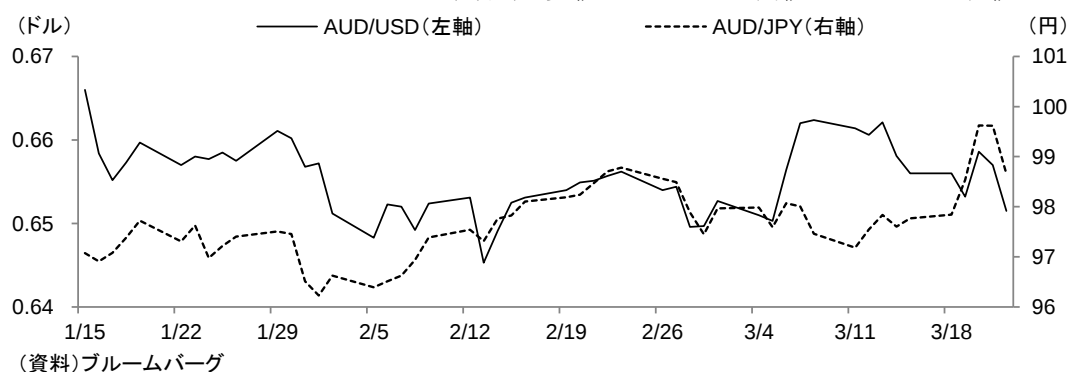
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、0.6504~0.6634で振幅した。18日は翌日にRBA政策金利発表を控えて、約20pipのナローレンジで推移した。NY時間で大型ハイテク株を中心に米株が反発するも豪ドルは動意薄でNY引けは0.6560。19日はRBAが市場予想通り政策金利を4.35%で据え置き、声明文で引き続きデータと経済見通しを注視と繰り返したものの、“further increase in interest rates cannot be ruled out”という文言が削除され、代わりに“The board is not ruling anything in or out”という文言が追加されたことで、利上げバイアスが僅かに後退したとの見方が浮上。0.6560付近からロンドン時間にかけて0.6504まで下落した。NY時間でS&P500が最高値を更新すると0.6532まで値を戻した。日銀金融政策会合では事前報道の通り、マイナス金利の解除が発表、国債買い入れのオペ継続が確認され、当面緩和的な金融環境が継続するとの見方から円安が加速し、豪ドル/円も98.60円近辺まで上昇。20日は0.6530近辺で取引開始後、FOMCを控えた警戒感から0.6513まで下落。FOMCでは予想通り政策金利の据え置きを決定し、同時に発表した金利見通しにおいて、年内3回の利下げという従来予想を据え置いた。市場が想定していたよりもハト派的との解釈で、株式相場はほぼ全面高となり、米金利は低下。ドルが急落する中、豪ドルは0.6587まで上昇して引けた。21日は朝方のFOMCがハト派的であったことから、序盤から買いが優勢となった。豪2月雇用統計が強い結果だったことを受けて更に豪ドルが持ち上げられ、一時0.6634まで上昇した。22日は0.6570近辺でスタート後、中国人民元のfixingが元安で発表されると、中国当局が何か月も防衛してきた7.20ちょうどを超える水準まで下落し、豪ドルも連れ安となり0.6530近辺まで下落した。中国当局が景気回復が鈍い中で通貨安を容認する構えとの見方が浮上し、香港株や上海株が大きく下げ、ロンドン入りまでこの流れが続き0.6511まで下落した。NY引けは0.6515で越週した。

今週は26日(火)RBNZ2月金融政策声明文についてコンウェイチーフエコノミストによる発表、27日(水)豪2月消費者物価指数(CPI)、28日(木)豪2月小売売上高、米10~12月期GDP(確報)、米3月ミシガン大学消費者マインド(確報)、29日(金)米2月個人消費支出デフレーター等が発表予定。豪2月CPIは前回値を僅かに上回ると予想されているが、更なる中国元売りにより豪ドルが下落する可能性にも注意したい。先週、パウエルFRB議長は講演で失業率が上昇傾向にある今、米当局は雇用減のスパイラルに歯止めをかけるため、しばらくインフレが高止まりするとしても金利を引き下げるとし、失業率が予想外に上昇すれば利下げに踏み切る可能性があると表明。米2月個人消費支出デフレーターが大きく上昇しなければ豪ドルは支えられるとみるが、更なる元売りにより引き続き頭を押さえられる可能性にも留意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/18~3/22)の値動き: (対ドル) 安値 0.6504 高値 0.6634 終値 0.6515
(対円) 安値 97.58 高値 100.17 終値 98.66



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。